

博士論文要旨

2015年1月13日

法学研究科博士後期課程 国際関係論専攻

学籍番号 JD060005

増古 剛久(Masuko Takehisa)

➤ 博士論文題目

「オガデン戦争を巡る国際関係史 -脱植民地化, 国家形成そして冷戦-」

➤ 博士論文要旨

1. 本論文の目的

本論文では、1977年7月に勃発し、1978年3月に終息したエチオピアとソマリアの紛争、通称、オガデン紛争を事例として、アフリカの角の主要国であるエチオピアとソマリア対立と、この対立を巡る米ソ超大国の対応を分析対象とする。そしてこの戦争の分析を通じて、アフリカの角における脱植民地化、国家形成過程そして冷戦の相互作用の実態を解明することを目的とする。

2. 問題意識と問題設定

独立後のアフリカ諸国は、後進性や貧困ゆえに、国家建設や近代化を達成するにあたって多くの難問を抱えていた。たとえば、開発や近代化のための資金、人材、技術などあらゆるリソースが不足していた。また、どのような発展（近代化）のモデルが国家の発展にとって適切なのか試行錯誤する状態であった。そしてアフリカ分割の時代、現地の社会情勢や民族分布が考慮されることなく、西欧列強によって人工的に国境が引かれた。そのため、独立後、アフリカの多くの諸国では、誰が、あるいはどのような勢力が、またはどの民族の代表が国家を統治していくのかという国内統治の正当性や権力巡る争いが存在し、その争いは時として暴力へと転化した。

このような、独立後のアフリカが抱えていた国内で山積する様々な問題に対処するうえで、米ソ超大国の対立は、独立後のアフリカの指導者やエリートにとって、非常に魅力的な機会となったのである。植民地から独立し、新しい国家を建設しようとするアフリカ諸国にとって、米ソ超大国の対立は、どちらの政治及び経済モデル、あるいはイデオロギーが優れているかを選択する機会を提供した。

そこでアフリカの指導者たちは、米ソ超大国の対立を利用して、超大国や旧宗主国から援助を獲得し、現地の問題の解決を目指し、国家建設を進めていくという手段を取り入れた。そのためにアフリカの指導者たちは、米ソ超大国のどちらかに加担することを表明し、加担した超大国の側から、国家の「支配の正当性」を与えられることによって、国内の権力基盤を固める手段を考えたのである。

だが、米ソ超大国から承認された支配の正当性は、国内では時として体制側による酷い腐敗と汚職、そして反体制派や他の民族に対する暴力を伴う苛烈な人権弾圧を生み出した。同時に、そのような政府に対する暴力的な抵抗を引き起こした。

このようなアフリカの指導者たちが冷戦を利用する手段について、国際政治史を研究するバーンは、アフリカ諸国の指導者は国内の支配の正統性を確立するために、現地の民族主義的な神話と冷戦期の東西陣営のイデオロギーを融合させたと論じる。言い換えれば、アフリカの指導者は、冷戦の対立を呼び込んで「外部」から支配の正当性を支えてもらう手段を講じたとも言える。

一方米ソ超大国にとって、アフリカにおける冷戦とは、アフリカ諸国を自分たちの陣営に引き入れるための競争の場として考えられ、その競争の優劣は、米ソ超大国のどちらのイデオロギーや政治経済モデルが、アフリカ諸国でより多く採用されるかで決まったのであった。しかしながら、米ソ超大国は、自分たちの味方をしてきている限りにおいて、体制側の腐敗や汚職や弾圧を黙認していた事実もある。

このように、冷戦時代に生まれたアフリカ諸国の腐敗や汚職、そして反体制派や他の民族に対する暴力的な弾圧と、弾圧に対する暴力的な抵抗といった特徴は、冷戦後の今もアフリカの様々な場所や多くの分野で深刻な問題を残している。

以上のように考えれば、独立後のアフリカの歴史の歩みと冷戦の時代は密接につながっていたと考えて良い。換言すると、独立後のアフリカの歩みは米ソのグローバルな争いの中で展開し、冷戦から非常に大きな影響を受けていたと言えるだろう。冷戦はアフリカ大陸に歴史上重大な、そして現在も続く影響を与えた。過去と現在のアフリカの状況は、米ソ冷戦と関係したことに多くの要因があるのではないだろうか。だとすれば、冷戦とアフリカがどのように相互に関係を持ち、お互いにどのように影響を及ぼし合ったのだろうか。本研究はこうした問題意識から出発している。

上記のような問題意識に解答していくため、本論文は、1977年7月に勃発し、1978年3月に終息したエチオピアとソマリアの戦争、通称、「オガデン戦争」を事例として、エチオピアとソマリアの対立と、米ソ超大国との関係を研究対象とした。

3. 研究方法

本テーマは、オガデン戦争の紛争当事者エチオピア・ソマリアと米ソ超大国の四カ国を中心にその戦争に関わった周辺諸国の動きを分析するものである。よって、国際政治史の研究手法によって実証的な研究を行った。そのため、英米及びケニア、エチオピアの史料を使った「マルチアーカイバル」による研究方法を取った。

4. 本論文の視角と独自性

本テーマに関して、これまでの先行研究では、どのように議論されてきたのだろうか。

アフリカの角と冷戦に関係する先行研究においては、近年の米国政治外交史の分野から、特にカーター政権期の米国側の外交政策や認識が明らかにされつつある。同様に、ソ連側の対アフリカの角外交政策に関する研究も進みつつある。

しかしながら、エチオピア、ソマリアなどの現地勢力が、なぜ、どのように超大国に関与し、または冷戦と関係を持ったのかに関する研究は今のところ豊かだとは言えない。言い換えれば、どのような現地の指導者の思惑や地域的な政治及び歴史背景が、国際関係の要因が重なり合ってオガデン戦争が勃発したのか、国際関係史的なアプロ

一からなされたものは菅見の限り皆無である。

従って本論文は、主要な先行研究の成果と問題点に留意しながら、アフリカの角と冷戦との相互関係を分析する上で、オガデン紛争の発生、経過そして終結のプロセスを国際関係史の視点のアプローチによって執筆された。そして以下の五つの点を本論文の独自性として重視し作成した。

第一番目に、エチオピアのオガデン地域（ソマリ州）がなぜエチオピアとソマリアの間の紛争の争点となったのかを先行研究に依拠しながら再構成し、明らかにした。そこで重要視したことは、植民地時代のオガデン地域の帰属問題がなぜ1970年代のエチオピアとソマリアの間の大規模な戦争を引き起こす原因となったのか、ここに収斂するような歴史解釈を提示することを試みた。

第二番目に、1977年のオガデン紛争と冷戦との関係を分析するには、1969年10月のソマリアのクーデターと1974年のエチオピアの革命を、当時の国際政治、特に冷戦に与えた影響を明らかにした。米ソ両国は、この「アフリカの角の二つの革命」によって、アフリカの角の外交を大きく再検討しなければならなくなった。

第三番目に、オガデン紛争の開始の背景と特徴を、現地情勢や国際政治過程と関連付けながら、オガデン紛争開始の背景には、ソマリ系住民の統合を目指す「大ソマリア主義」だけでなく、エチオピアとソマリアの二国間関係だけでなく、米ソ超大国や周辺諸国を含めたアフリカの角に対する思惑が大きく影響していたことを明らかにしている。

第四番目に、国際関係史の視点からオガデン紛争の発生から終結までの過程を分析していった。それによって、オガデン戦争の勃発から終結の過程は、紛争当事者のエチオピアとソマリアよりも、米ソを中心とした「外部勢力」の思惑が大きな影響を与えていることを明らかにした。

第五番目には、本研究の分野では頻繁に議論されているアフリカの角と米ソデタントの崩壊との関係である。これまでのアフリカの角における米ソ間の攻防は、デタントに悪影響を及ぼしたのかどうかという視点から議論が試みられている。

それに対して本論文では、アフリカの角では1972年5月29日にニクソンとブレジネフによって合意された「米ソ関係基本原則」に基づく米ソデタントが、結果として偶然にも守られたのではないかと、これまでどの研究者によっても指摘されなかった仮説を試みる。そしてオガデン戦争を通じて形成されたアフリカの角と米ソ冷戦の関係について試論した。

5. 章立てと小括

本論文は5つの章によって構成される本論と、序章及び終章によって構成されている。

第1章は前史である。なぜソマリ系住民が圧倒的に多数住んでいるオガデン地域がエチオピア領に属することになり、エチオピアとソマリアの対立の争点となったのか、アフリカ分割の時代に遡って説明する。またエチオピア人とソマリア人にとって、オガデン地域を巡る認識が決定的に異なっていることも説明する。ソマリア人にとって、ソマリア国家の分断は「二重の帝国主義」の犠牲だとの認識があったことを明らかに

した。一つ目の帝国主義とは、ソマリアがイギリスとフランスによって、イギリス領ソマリランドとイタリア領ソマリランドに分割されたことを指す。二つ目の帝国主義とは、エチオピアによってオガデンがエチオピア領に吸収されたことを指す。このような経験を経て、ソマリア人は、ソマリア国家とソマリ系住民はイギリスとイタリアによって分断され、同時にエチオピアによってオガデンを奪い取られたと認識するに至った。さらにソマリ系住民の反英・反エチオピア闘争がオガデンで開始されたことによって、ソマリア人の間では、オガデンは「二重の帝国主義」の犠牲の象徴だと神話化された。

それに対してエチオピアにとっては、オガデン地域は、西洋列強の帝国主義による「アフリカ分割」から、エチオピアの独立を死守するために、イギリス、フランスそしてイタリアと外交や戦争を経て、自国民の犠牲者を出してまで勝ち取った自国の領土であるとの認識がある。

こうした歴史認識を巡る決定的な相違が、長年に渡るエチオピア・ソマリア対立の起源となっている。こうしたオガデン地域の歴史的な特徴を導き出すことは、なぜオガデン戦争がソマリアの侵攻によって勃発したのかを問いかけ、分析していくにあたって極めて重要であると考えられたからである。

第2章では、ソマリアとエチオピアで起きた「アフリカ角の二つの革命」を中心に扱う。一つの革命は、1969年10月21日、ソマリでシアド・バーレによって起こされたクーデターである。このクーデターを経て、ソマリアは急進的な社会主義化へ向かい、ソ連と化の関係を緊密にしていった。同時に、大ソマリア主義を基盤とした外交政策を開始した。続いて二つ目の革命は、1974年9月12日にエチオピアで起きた革命である。この革命によってハイレセラシエ皇帝は失脚し殺害された。そして革命後のエチオピアは、ソマリアと同様に急激な社会主義化政策を進め、エチオピアの指導者メンギスツも同じくソ連に接近を試みた。ソマリアとエチオピアが社会主義化して目指すべき国家像は何であったのか。エチオピア側がソ連に接近したことに対して、ソマリアのバーレは非常に不快感を抱き、同時にソ連に対する疑念を増大させた。

一方でソ連政府は、対立するソマリアとエチオピアが社会主義化し、ソ連との関係を進展させていこうとする試みによって、アフリカの角で極めて難しい外交のかじ取りを迫られることになった。同様に米国も、ソマリアとエチオピアが社会主義化したことによって、アフリカの角外交の検討を迫られることになっていた。

このように第2章では、アフリカの角で起きた二つの革命は、オガデン地域を巡るソマリアとエチオピアの関係に影響を与え、同時に、ソマリアとエチオピアの社会主義化によって、米ソ両超大国との関係に影響を及ぼし、アフリカの角と超大国との関係が形成されていったのかを明らかにした。

第3章では、1977年2月から1977年7月のオガデン戦争勃発直前までのアフリカの角及び国際政治の情勢を分析した。米ソ超大国は、アフリカの角で起きた二つの革命によって、アフリカの角での外交政策を再検討しなければならなくなった。この米ソ超大国による対アフリカの角外交の再検討が、ソマリアのオガデン侵攻に大きな影響を与えたことを明らかにした。

第4章と第5章では、オガデン戦争を1977年7月から10月までを「第一期」、77

年11月から78年3月のオガデン戦争終結までの「第二期」と二つの時期に分けて論じた。オガデン戦争第一期では、ソマリア軍がオガデン地域深くに攻め込み、ソマリア有利の戦況であった。それに対してオガデン戦争第二期では、ソ連とキューバからの支援を受けたエチオピアが反撃を開始し、ソマリア軍をオガデンから駆逐し、戦争は終結した。そしてオガデン戦争を二つの時期に分類する理由は以下の通りである。

ソマリアもエチオピアも、オガデン戦争の戦況によって、米ソ超大国に対する外交上の態度を変化させたのである。同時に、米ソ超大国の対アフリカの角外交も変化を見せた。すなわち、オガデン戦争の第一期と第二期とでは、紛争当事者のエチオピア、ソマリアと米ソ超大国の四カ国の関係が大きく変容したのである。それゆえ二つの時期に分けて論じていく必要があると考えた。

第4章ではオガデン戦争の「第一期」を扱った。オガデン紛争開始後から、ソマリア側がエチオピア領のオガデンに深く攻め込んでオガデン地域の大部分を支配していた時期である。この時期、紛争当事者であるエチオピアとソマリアと米ソ超大国はどのような関係を持ったのかを明らかにした。

オガデン紛争は、明らかにソマリア側がオガデンに侵攻して開始された紛争である。だが、ソマリアのバーレはこの事実を認めようとしなかった。この理由は本論で明らかにされているが、バーレの米ソ超国外交の戦術が存在していた。オガデンへの侵攻を巡って対ソ関係が悪化したソマリアは、ソ連圏からの離脱を約束し米国に対して軍事援助を要求した。それに対してカーター政権は、いったんはソマリアに対する軍事援助を約束しながらも突如中止を決定した。この事例が示すよう、ソマリアは米国の外交政策に翻弄されたと言う側面があった。

一方エチオピアは、戦況が圧倒的に不利になったため、ソ連に対してエチオピアの社会主義の危機を煽り、軍事援助を要求した。エチオピアは、ソ連の力を利用してオガデン戦争を遂行しようとしたのであった。同様にエチオピアは、米国との関係改善を仄めかしながら米国側と接触し、カーター政権のソマリアに対する軍事援助を批判することによって、カーター政権によるソマリアの軍事援助を阻止するような外交を試みた。このように、エチオピアは米ソ超大国に対して主体的に外交を展開した。

それに対してオガデン戦争第一期の米ソ超大国のアフリカの角外交はどのように展開されたのだろうか。ソ連及び東側ブロックがエチオピアを支援するために大規模且つ積極的に介入を行う決定を下した一方で、米国政府は、ソ連やキューバがアフリカの角での勢力を拡大することに深刻な懸念を抱いていた。だが、米国政府は、侵略した側であるソマリアに対して公然と支援をすることは困難であった。こうした事情によって、米国政府は7月にソマリアへの軍事援助を決定しておきながら8月になって急きょ撤回した。このように米国のソマリア支援を巡る外交政策がなぜ迷走したのか、その理由を明らかにした。

さらに周辺諸国の動きも分析した。アラブ諸国は、イスラム教国家でありアラブ連盟の一員であるソマリアを積極的に支援した。一方イスラエルは、宗教的且つ地政学的な理由からエチオピアを支援した。また米国の同盟国であった英国は、ソマリアを支援する米国に対して支持を表明したが、国内にソマリ系住民を抱えソマリアを自国の安全保障上の脅威とみなすケニアから猛反発を受ける。英国とケニアはコモンウェ

ルスを構成していたため、英国政府は米国との同盟関係と旧植民地との連合体との間で対アフリカの角外交を慎重に進めざるを得なくなっていた。以上述べたように、オガデン紛争は米ソ関係だけでなく、東西の同盟や連邦の紐帯や信頼性に影響を及ぼしたことを明らかにした。

第5章ではオガデン戦争の「第二期」を扱った。10月頃からソ連とキューバの軍事介入が本格的になり、戦況がエチオピア有利に働き始め、11月頃には、エチオピア軍とソ連及びキューバ軍はソマリア軍に対して大規模な反撃を開始した。その結果、エチオピア軍はソマリア軍をオガデンから駆逐し、1978年3月オガデン紛争が終結した。オガデン戦争の第二期において、ソマリアにとって戦況が不利になると、バーレ大統領は、オガデン戦争をソ連の拡張主義に対する戦争であると、オガデン戦争の争点を米ソ超大国の対立に転換させ、米国からの軍事援助を獲得することを試みる。むしろ米ソ以上に現地勢力のソマリアの側が「冷戦」を利用し、オガデン戦争に米ソを招き入れることを試みた。

一方、エチオピアはオガデン戦争に勝利するために、エチオピア軍がソ連軍の指揮下に入ることを余儀なくされた。ソ連にとっても、エチオピアにおいてソ連型社会主義モデルに基づく国家建設を進めるには、オガデン戦争でのエチオピアの勝利が前提条件となっていた。このようにオガデン戦争第一期とは異なって、オガデン戦争第二期では逆にソ連の方からエチオピアに対する介入の度合いを強めていったのである。以上述べたように、オガデン戦争の第一期と第二期では、紛争当事国のエチオピア及びソマリアと米ソ超大国の関係が変わってきた。

そして第4章と5章の分析を踏まえて、本論文は、オガデン紛争の帰趨は外部からの介入や関与によって決定されたことを明らかにした。また、先行研究で紹介したように、オガデン紛争を巡る米ソの対立は、米ソデタントに影響を及ぼすことになったと言う見解がある。確かに米ソは、アフリカの角を巡る攻防でデタントの危機を主張し合った。だが、オガデン戦争の第二期に入り、エチオピアに戦況が有利になると、エチオピア軍によるソマリアへの「逆侵略」問題が浮上してきた。これはアフリカの角を舞台に米ソ関係を悪化させる可能性をもたらした。そのため米ソ両国は、オガデン戦争の解決に向けて、現地勢力であるエチオピアとソマリアの意思を確認する外交を展開し、現状の国境の維持を合意したのである。こうして、アフリカの角では米ソデタントは維持されたのではないかと言う仮説を提示した。

6. 結論

本論の結論を、オガデン戦争勃発の要因、オガデン戦争と何だったのか、そしてオガデン戦争を通じて形成されたアフリカと冷戦との関係についての三点に絞って述べていく。

最初に本論で明らかにされたオガデン戦争勃発の要因を述べていく。1977年7月にソマリアのバーレ大統領がオガデン侵攻を決断した理由は、オガデンを奪還し、ソマリア人の統一を目指す「大ソマリア主義」を実現するためだった。但し、バーレがオガデンに侵攻するにあたっては、大ソマリア主義だけでなく、エチオピアとソマリアの二国間関係に加えて、米ソ超大国との関係にも要因があることを明らかにしてきた。ソマリアのオガデ

ン侵攻は、様々な要因が重なって起こされたものであったのである。以下簡潔に示していきたい。

エチオピアとソマリアの二国間関係では、1977年代早々からのエチオピア国内の混乱を好機と捉えて、バーレ大統領はオガデンを奪還する行動に踏み切る決断を下したのである。

そして米ソの対アフリカの角外交がソマリアのオガデン侵攻の大きな要因を形成したことを論じた。

ソ連のエチオピアへの軍事援助の開始は、ソマリアの安全保障上の脅威となった。そのためバーレは、ソ連のエチオピアへの軍事援助が大規模化する前にオガデンを奪還することを決意したのである。これがバーレのオガデン侵攻の決断の要因の一つになった。

また米国を始めとした西側諸国とソマリアとの関係が、バーレのオガデン侵攻の決断に影響を与えた。カーター政権は、ソマリアがソ連陣営から離脱することを条件にソマリアへの軍事援助を検討した。それに対して、対ソ不信が増大していたソマリアは、ソ連陣営からの離脱を約束して、米国を始めとした西側陣営からの援助を求めた。オガデン戦争を前に、米国及び西側陣営とソマリアとの利害が一致したのである。本論第三章で詳細に見てきたように、ソマリアはオガデン戦争開始前の米国側との交渉の末、オガデンでエチオピアと戦闘が開始された場合、米国から軍事援助を獲得できるとの約束が得られたと確信した。言い換えれば、ソマリア側はそのように認識するような態度を米国側は取ったのである。こうして、バーレはオガデン侵攻によってエチオピアとの戦端が開かれたとしても、軍事物資に困窮すると言う懸念が回避されると考えた。これもバーレのオガデン侵攻の決断の要因の一つになったと言って良い。

続いて二番目に、オガデン戦争とは紛争当事者のエチオピアとソマリア及び米ソ超大国にとって何だったのかを述べていきたい。

エチオピアにとってオガデン戦争とは、侵略者ソマリアから領土や国境を守る戦争に加えて、エチオピア革命の目的とオガデン戦争の勝利の必要性が結びついた戦争である。そのためにエチオピアは、ソ連からの軍事援助を必要とした。ソ連からの介入を受けてオガデン戦争を戦わなければならなくなったのである。

その背景には、革命後、米国との関係を解消し社会主義路線を歩み始め、ソ連の支援を得てソ連型社会主義モデルに基づく国家建設を進めたことが存在する。だが、オガデン戦争の開始によって、ソ連からの軍事援助を受けてオガデン戦争に勝利することが、社会主義に基づく国家建設の前提となってしまったと言う状況があった。

それに対してソマリアにとってオガデン戦争とは、オガデンを奪還し、ソマリ系住民の住む土地の統合を成し遂げ、大ソマリア主義を達成することを目的とした戦争であった。言い換えれば、ソマリアにとってオガデン戦争とは、脱植民地化を達成することを目的とした戦争であった。オガデン戦争期のバーレの米ソ超大国に対する外交を見れば、むしろ社会主義に基づく国家建設よりも、大ソマリア主義を優先させたことは間違いない。そこには、アフリカ分割の時代に、ヨーロッパ列強とエチオピアによって、ソマリ系住民が住む土地が五つに分割されたと言う歴史的経緯があった。こうした歴史的経緯があったからこそ、ソマリアにとって、オガデンに軍隊を進めて戦

うと言うことは侵略を意味せず、解放戦争を意味した。ソマリアがこの目的を達成させるために軍事援助の獲得を最優先させたことによって、オガデン戦争期におけるソマリアと米ソ超大国の関係が規定されていった。

一方米ソ超大国にとってオガデン戦争とは何であったのか。

ソ連にとってオガデン戦争とは、軍事援助を手段としてイデオロギー上の同盟国を選択する戦争であったと言える。そのために、オガデンに対する態度を判断基準にソ連に対する忠誠度を判断し、エチオピアとソマリアのどちらがソ連の要求に従うかを試したうえで同盟国を選択した。具体的にはカストロ構想に対するメンギスツの肯定的反応と、ソマリアの否定的な反応に関するソ連側の評価を見れば理解できよう。こうしてソ連はエチオピアを選択すると、ソ連の第三世界外交の柱であった「民族解放闘争」を捨て去ってまでも、メンギスツを支援した。このことは、ソ連は当初アフリカの角ではエリトリア民族解放闘争へ支援をしていたが、後にメンギスツとの同盟を選択したことからも理解できよう。そしてオガデン戦争では、ソ連は莫大な軍事援助を行ってまでエチオピアの勝利を決定づけたのである。ソ連にとってエチオピアのオガデン戦争での勝利は絶対的に必要な条件であったのである。

またイデオロギー的な背景に加えて、ソ連が戦略上の理由から、アフリカに対する足掛かりを模索していたことも大きな理由であった。1970年代後半、アフリカの角におけるソ連の立場は厳しいものだった。スーダンやエジプトが反ソに転じ、本論で述べたよう、ソマリアと軍事同盟を破棄するなど、アフリカの角地域はエチオピア以外に親密な国家は存在しなかったのであった。

一方、米国政府にとってもオガデン戦争とは同盟国を選択する戦争であり、米ソ超大国の対立をオガデン戦争に反映させたと言える。その米国政府の対アフリカの角外交は、エチオピアに対するソ連とキューバの影響力に対抗することに主眼が置かれた。その背景には、1974年のエチオピアの革命によって、第二次世界大戦後から同盟関係であったエチオピアを失ったことがある。よってカーター政権は、ソ連とキューバの行動をアフリカの角に対するソ連とキューバの拡張主義と捉え、アフリカの角に対するソ連とキューバの影響力の拡大の阻止をアフリカの角の外交の目的に据えた。

そこでカーター政権はソマリアに対する軍事援助を検討した。だが、オガデンへ侵略したソマリアに軍事援助を実施する根拠を探すことは困難だった。そのため、カーター政権は、アフリカの角におけるソ連とキューバの影響力阻止のための効果的な外交政策を実施することができなかった。そしてカーター政権の苛立ちが反映された結果、ブレジンスキーは、アフリカの角へのソ連とキューバの拡張主義をデタントの危機と煽り、SALT交渉の成功の条件として、ソ連のアフリカの角からのキューバの撤退を迫ったのである。以上、米ソ超大国にとってのオガデン戦争の持った意味を提示した。

第三番目として、本論を通じてオガデン戦争と米ソ超大国との関係を研究することで、冷戦史においてどのような知見を導き出せたのか、また冷戦がアフリカ大陸にもたらしたものは何だったのかを試論したい。

本論で明らかにされたよう、オガデン戦争への対応を巡って米ソ超大国は対立しながらも、エチオピアとソマリアの領土保全の原則を遵守することで合意した。このこ

とは、オガデン戦争を巡る米ソの外交を通じて、米ソ超大国によってアフリカ大陸に初めて具体的に実践されたと言える。この結果、米ソ超大国は、アフリカ大陸の国際秩序を守ることに寄与したと言っても良い。だが、このことは言い換えれば、皮肉にもアフリカ分割の時代に引かれたエチオピアとソマリアの国境線に加えて、アフリカ大陸の国境線の現状維持が冷戦によってさらに牢固になったことも意味した。

(了)